

解答

一

問一 自分の息子の絵が上達し絵師としての力をつけていくことは父親としてはうれしいことだが、それは鳥居の五代目を育てる役目を負う四代目としては、自分たち親子が鳥居の家系を乗っ取ることになるかも知れないこともあるから。

問二 絵をやめる、これ以上は伸びないと父親から言われてショックを受け、いっそ右手が使えなくなってしまえば絵が描けなくなり、絵のことをあきらめられると思ったから。

問三 芝居小屋に達者な絵を描く若者がいると聞いて来てみたら、それが姿を消していた白子屋の若旦那の政之介だったから。

問四 父に能力を認められなかつたり、絵の能力があるばかりに絵をやめるよう言われたりすることへのくやしさが荒々しい線となり、芝居小屋で書割を描いたり、舞台のそでから人気役者たちの姿を観察したりした経験が生命力のある線になつたからだと考えられる。

二

問一 血液型占いに科学的根拠はないのに、血液型で人を分類できると勘違いされており、これは、人間が持つ本來の可能性を読み取り、他人の運命や人生まで左右することもある大変危険なことだということ。

問二 この世の事象は、すべて平均のラインを上下しつつ結局は平均の数字に回帰するという「平均への回帰の法則」に基づいているとどちらえれば、心のゆらぎにつけ込もうとする一種ニセ科学にだまされずに、自分自身の努力と熱意で生きしていくことができるようになると考えている。

三

- (1) 頭角
- (2) 断腸
- (3) 復刻
- (4) 遊覧
- (5) 針小棒大

解説

一

問四 「(父親は)認めてますよ。認めてるから、筆を折らせようとした」と葛屋から知られたこと、父に認められるほどの腕がありながら絵を描くことをやめさせられなければならぬことにくやしさを感じたことが「荒々しい線」となつたと考えられます。また、芝居小屋に身を隠し書割を描きながら「人気役者たちの姿はすべて、舞台のそでから盗み見て描いていた。それを思い出すだけで、自然と筆は動いた」という経験が、政之介の画風に生命力を与えたと考えられます。

二

問二 前の段落の最後で述べられている「すべての人間に適用できること勘違いすることで、他人の運命や人生まで左右するようになつてしまつと大変危険」とあり、その例として「血液型」の現象が説明されています。「血液型によって人を分類し排除するという、おそらくもバカげたことが、一部で実際に行われている」「これは人間が持つ本来の可能性を読み取ることにはかならない」「人生というものは、自分自身の努力や熱意によって決まるもの」「外側から買ってに貼られたレッテルなどまったく気にする必要などない」と筆者は主張しています。